

釧路湿原自然再生協議会
第17回再生普及小委員会
議事要旨

平成23年6月7日開催

■ 再生普及行動計画ワーキンググループの経過報告について

事務局より再生普及行動計画ワーキンググループの経過報告が行われた。内容は、昨年度のワンダグリンダプロジェクト2010の活動報告と、今年度の取り組み予定を中心に説明がなされた。

委員長

- 2010年度の再生普及小委員会では、森林再生小委員会を取り上げ、自然再生の今を伝えるという内容に基づき、ブログ作成やWEBページ作成などの情報発信を行なった。
今年度は、旧川復元や土砂流入などの他小委員会の取り組みを紹介したいと考えている。
市民の方々が実際に自然再生の現場を見学する機会を設け、活動に参加するサポート体制を整えるという取り組みを予定している。
- その他、これまでの議題に関してご意見などがあれば、発言いただきたい。

委員

- 5月のチューリップ&花フェア開催時の会場に、ワンダグリンダプロジェクト2009の報告書を置いた。来訪者の方々に気に留めていただき、持ち帰る方もかなりいたので、今後も各種イベントの会場に置くとアピールできるのではないかな。

委員長

- ワンダグリンダプロジェクト2010の報告書も1200部程印刷したので、色々な折に、配布する機会を設けていただけるとありがたい。

■ 環境教育ワーキンググループの経過報告について

事務局より環境教育ワーキンググループの経過報告が行われた。内容は、昨年度の取り組み報告と、今年度の取り組み予定を中心に説明がなされた。その後委員による意見交換と検討が行われた。

委員長

- 昨年度の環境教育ワーキンググループの取り組みのひとつとして、小学校の理科と社会科について、釧路湿原に関する学習と教科学習の関連性を整理する試みを行なった。

委員

- 各市町村では、小学校3、4年生で郷土学習を実施しているところが多い。

委員長

- 教科学習は普遍的な内容であり、そこに釧路湿原という所謂ローカルな内容をどう結びつけるのか、技術や趣向を必要とするのではないか。対応する教員を対象に教員研修を実施する予定がある。

■ 5年目の施策の点検について

事務局より釧路湿原自然再生全体構想5年目の施策の点検についての説明が行われた。5年目の施策の点検は、釧路湿原自然再生全体構想における施策のうち、「6 持続的な利用と環境教育の促進」において達成すべき目標について点検案が提示された。詳細に渡る説明を数回に挟み、委員による意見交換と検討が行われた。

委員長

- 5年目の施策の点検については、曖昧な表現の点検結果ではなく出来るだけ具体的に数値化した。但し、数値化できないものは別の方法で評価する。これを12月の小委員会までに精査し最終的な結果をまとめたい。

(目標1) 湿原や地域産業を題材とした環境教育のプログラムや機会、施設、人材の充実を図り、そのネットワーク化を進めます。

事務局

- 再生普及行動計画の具体的取り組みとしてワンダグリンドプロジェクトを実施している。また、学校に向けた環境教育促進については環境教育実施の参考となるガイドブックなどを作成した。本目標については一定の成果が見られており、引き続き目標達成に向けて取組を拡大していきたい。
- ワンダグリンドプロジェクトの取り組み数の推移を見ると、5年間で確実に増加しているのが数値に出ている。

委員

- ワンダグリンド事務局の熱心さが、民間企業と個人のプロジェクト数の増加につながっているのではないか。

委員

- 着実に地域に浸透している印象がある。一気にではなく少しずつで構わないので、息の長い辛抱強い活動が増加につながる。

委員

- 1年目から2年目にかけての減少を、3年目でリカバリーした状況をグラフで見て取れる。

委員

- エコクラブは、5、6団体あったのに、去年から私たちのクラブだけになった。もう少しPRが必要かと思う。ガイドブックが配布された直後はすごく増えた。最近は、限られた学校の団体が多い気がする。

委員

- ボランティアレンジャーの活動は多くなった。教育現場に出向く機会もあるが、教員によって意識が違い、子供たちの熱心さも変わる。

委員長

- 環境教育WGの中でも、先生たちの意識を掻き立てたいという意見がよく出る。

委員

- 標茶高校では、昨年、環境サミットを開催し、全国から高校生が集まった。当番校であれば、担当教科以外の先生たちも協力して各機関や町との連携をはかるが、行事が終わると、関心が薄くなるのは事実なので、教員に対する継続的な啓蒙というのは必要かもしれない。

委員

- ビジターセンターにも、学校単位での見学はあるが、引率する先生は、湿原のことを事前に勉強してほしい。

委員

- タンチョウサンクチュアリでも、タンチョウと湿原を絡めた独自のプログラムを作っている。先生たちが学校に持ち帰って授業に取り入れたいと言ってくれるが、難しいようだ。小委員会でも教員研修を実施するという事なので、自分たちで出来るようにバックアップをしてはどうか。

委員

- タンチョウ保護研究グループでは、学校関係者の問合せなどは殆ど無く、マスコミ関係者が多い状況である。

委員

- 最初から数値評価をするターゲットではなかった活動を、後から数値化するのは凄く難しいと思う。団体やプロジェクト数だけではなく、そのプロジェクトの広がりを表す対象者や参加者数の推移もあればいい。また、現代の子供たちは何かと忙しいので、冬期間に活動参加の機会を作っても良いのではないか。

事務局

- 全体構想の施策において達成すべき目標には、評価基準も記載されている。今回の数値化したものは、この基準に基づいてできる限り数値化した。

(目標2) 自然再生事業の情報発信を積極的に行い、事業への市民参加の推進を図ります。

事務局

- 自然再生事業の情報発信として、パネル展示や講演、HP作成、メールニュース配信を行うなど情報発信の仕組みはある程度確立され、その結果、一般市民への自然再生事業に関する周知は少しずつではあるが図られてきている。ただし、その周知や自然再生事業への市民参加の取り組みはまだ十分とは言えない。本目標については、達成に向けて更なる取組を行っていく必要があると考える。

委員長

- 情報配信についてだが、工夫を凝らしてはいるのだが、HPへのアクセス数は激減している事実がある。

(目標3) 湿原の利用に関するガイドラインやルールづくりを進めます。

事務局

- 釧路川におけるカヌーの適正利用ガイドラインの作成や入川ポストの設置、釧路湿原の利用ルール等を記載したガイドマップの作成を行い、一定の浸透がなされている。今後はこれらのさらなる普及が重要となると考える。

委員長

- 入川ポストが目立たない場所にあり、気付かない人が多いと報告がある。意識付けを目指した運用方法が検討される必要がある。

(目標4) 湿原やその周辺の環境を持続的に利用する産業発展のあり方を検討し、連携を図ります。

事務局

- 観光業においては、近年利用者数は減少傾向にある。また、カヌー利用者は、近年は全体的に横ばいか減少傾向と予測される一方で、中高年・修学旅行・外国人の利用者は増加傾向にあると予測される。農林業などその他の産業に関しては今のところ自然再生事業との目立った連携は見られていない。

自然再生事業を持続可能な形で継続させるためには、地域産業を巻き込んだ形で自然再生事業を進めていく必要があり、この課題に向けてさらに検討を行っていく必要がある

委員

- 湿原が嫌われて、観光客等が減少したのではなく、来る手段が無くなってきているから減少傾向にあるのではないか。エコツーリズム自体に問題は無く、PR等、手法に検討が必要とされる。

(目標5) 植生等の保全・修復によって、自然景観の維持・改善を図ります。

事務局

- 鉏路湿原周辺では多くの団体が清掃活動を行っており、ゴミの量は減少傾向にあると予測される一方で、不法投棄や違法伐採等が見られている。また、外来生物の生息拡大が見られ、防除の取り組みが行われている。本目標については今後、景観の維持・改善のためにどのように取り組んでいくかを検討していく必要があると考える。

委員

- 外来生物の問題の深刻度は、外来生物の多様化をふまえると極めて高く、市町村との連携をとった対応が必要と考える。

委員長

- 外来生物の問題は緊急且つ危険な課題として、危機感を持って明記する必要があるのではないか。
- 5年間の見直しについて12月の小委員会までに成文化したい。

事務局

- 本日のご意見を踏まえ、再度点検案を作成し、次回の小委員会までに提示したい。

■今後の予定

事務局より今後の予定について説明が行われた。

事務局

- 今後、8月頃に環境教育ワーキンググループを行い、11月頃に行動計画ワーキンググループを行う。12月頃、次回の再生普及小委員会を行いたい。